

# KNCE NEWS

日本経団連  
自然保護協議会  
だより

No.35  
September 2005



## CONTENTS

### Special Features

〈特集1/記念講演〉

世界の巨樹から見た  
自然の姿と人の  
かかわり

写真家 吉田 繁 .....3

〈特集2/スタディーツアー〉

屋久島で  
企画部会を開催 .....18

### Opening Article

自然への畏敬の念と  
循環型社会の形成

株式会社資生堂 取締役 会長 池田 守男 .....1

### Features

〈トピックス〉

企業とNGOの交流会 .....7

〈企業の自然保護活動〉

積水化学工業

田んぼから

自然環境を学ぼう .....9

三菱電機

富士山植林・育林参加

ボランティア活動 .....10

〈支援プロジェクト事業報告〉

Kukup島内・周辺における  
地域住民向け環境教育および  
生物多様性保全計画の開発

Wetlands International-Asia Pacific Malaysia .....11

御蔵島におけるバンドウイルカの  
保全のための啓発活動

御蔵島バンドウイルカ研究会 .....12

〈NGO活動成果報告会〉

第18回報告会の概要 .....17

### Series

企業が進める自然環境教育の  
現場を訪ねて〈2〉

TEPCOベアウォッチング自然観察会 .....21

### KNCF News Selection

● 藤原中学校生が自然保護協議会を訪問 .....13

● 愛・地球博でパネル展示 .....13

● 2005年度総会のご報告 .....14

● ご寄付をいただいた皆様(法人・個人) .....15

表紙写真: 日本国際ボランティアセンターが村落開発事業を手がけている、  
ラオス・カムアン県での1シーン。

写真提供: (特)日本国際ボランティアセンター

\*本誌はすべて再生紙を利用しています。

## 巻頭言

# 自然への畏敬の念と循環



株式会社資生堂  
取締役 会長  
池田 守男

私たちは戦後60年にわたり、ひたむきに物質的な充足を追い求めてきた。その結果、経済は高成長を遂げ、GDPでは世界第2位までに至った。しかし、一人ひとりの暮らしや生活はどうだろうか。おしなべて標準化され規格化された社会の仕組みの中では、真の豊かさを享受できていないのではと思う。何かを手に入れたのは確かだが、物質面と精神面のバランスを大きく崩してしまった。大量生産、大量消費、大量廃棄を繰り返した結果、人間らしさや精神性を失い、何より自然や地球環境というかけがえのないものまで犠牲にしている。

いまから約30年前、ストックホルムでの国連人間環境会議の開催にさきがけ、「地球という天体は無限に消耗可能なものではないので、際限のない開発や大衆消費社会の進展は抑制すべきである」という強い警告が発せられた。人々は大きな衝撃を受け、地球環境は世界の主要テーマに急浮上した。しかし、過剰な開発や経済成長を抑えるという考えはいっこうに浸透せず、世界中で環境破壊が繰り返された。

現在では、限られた資源を保全する必要性は誰もが認識している。しかし、その実行となると、地球温暖化対策がそうであるように、先進国の中でさえ京都議



定書をめぐる意見は集約できない。また、その対応においても、いまだ規模の経済を優先するあまり遅々として進んでいない状況にある。では、何故このような状況にあるのだろうか……。それは、私たち人間が、いつの間

# 型社会の形成

にか傲慢になり、自然や地球との基本的なつながりを十分に認識できなくなったからだと思う。

そもそも、私たち人間は他の動物や植物・鉱物などと同じように、地球という物体のひとつの構成要素にすぎない。いまから約1万年前に、人間は、それまでの狩猟というライフスタイルから、農耕・牧畜のスタイルを選択した。地球という自然環境の中で資源やエネルギーを分けてもらう生活とは決別し、自らの意志で、地球の資源やエネルギーを消費し、不要なものを捨てるという生活習慣を持つようになった。以来、長い年月が経過する中で、人間は地球資源を消費し続けるにつれ、あたかも地球や自然を支配するかの錯覚を持つようになったのだ。

しかし、地球は人類だけのものではない。あらゆる動物や植物、そしてこの世界に存在する万物の共通資産なのである。したがって、私たち人間は、地球の中で存在できていることに心から感謝し、愛情と畏敬の念を持って地球や自然と接しなくてはならない。個人としても企業としても、20世紀後半の経済至上主義の痛烈な反省の上に立ち、「限られた地球資源の中で、どうしたら循環型の社会が構築できるか」という将来を見据えた課題を自らに問い、これに対する対策を全員で真剣に創り上げるときである。モノを大切にす心、自然への愛情と畏敬の念を全員が持つときだと思う。戦後60年の節目の今年こそ、こうした考えに立ち自然や地球環境問題に取り組む出発点にしたい。

私どもの化粧品業界の使命は、新しい価値の発見と美しい生活文化の創造を通じて、お客さまのお役に立ち、社会に貢献することである。それは、「天地万物のあらゆる資源を融合して新しい価値を創造する」という、当社の社名の由来である易経の一節、「至哉坤元(いたれるかなこんげん)、万物資生(ばんぶつとりてしょうず)」に通じるものである。

美しい生活文化の追求には、社会性や人間性の追求が欠かせないものであり、当社では1997年に「地球環境は重要なステークホルダーのひとつであり何ものにも優先して取り組む」ということを社会に宣言した。そして、他の企業と同様に、生産工場のゼロエミッシ

ン化、商品や包装資材の徹底した減容・減量化、お客さまや販売店のご協力のもと使用済み化粧品ガラスびんのリサイクルなど地球環境対策に取り組んできた。

最近では、トヨタ自動車株式会社の協力を得て、共同で植物由来プラスチックの化粧品容器への応用開発と利用を始めた。このような取り組みは、まだ始めたばかりであるが、環境対応の技術は、企業が独自で開発利用するより、各企業が共同で進めることで大きな効果につながるものと思う。今後、経団連参加企業のみならず経済界全体で、環境対応技術の開発と共有を進めることで、循環型の経済社会の実現を進めてまいりたい。

「CSR(企業の社会的責任)」が叫ばれる中、いまや環境問題、人権問題、企業倫理への取り組みなどは、各企業とも経営課題の中心に据えていると思う。しかし、今後の地球環境問題への対応とは、従来の延長線上のものではない。それは、「限られた地球資源の保全を前提としてビジネスモデルを再設計する」くらいの気構えで取り組むべきものであり、21世紀初頭に私ども企業に突きつけられた大命題だと思う。右肩上がりの経済が終焉し、少子高齢化が進み人口減少社会を迎える今日、むしろこのような社会構造の大変革を好機ととらえ、この大命題に正面から取り組んでいくべきだと思う。

そして、私たち一人ひとりに求められることは、人間は地球の中で生かされているという認識を持ち、地球や自然への畏敬の念と謙虚さを持つことに他ならない。私たち一人ひとりが、モノを大切にす心、他者を尊ぶ心を持ち合わせ、人間のみならず自然との関係性を心温かなものとする努力を払うことが重要である。こうした一人ひとりの活動の積み重ねが、人間が自然と一体となって存在する第一歩であると思ってやまない。人間の世紀における新たな循環型社会の形成に向け、ともに努力してまいりたい。



地球はこの世界に存在する万物の共通資産。オオワシの写真提供: BirdLife-Asla。

特集1

## 記念講演

写真家  
吉田 繁

当協議会の2005年度総会を記念して、  
巨樹を中心に自然写真を撮り続けている  
写真家・吉田 繁氏に講演をお願いしました。  
カナダの先住民族ハイダ族が受け継いできた森を守るための教え、  
個人が所有することで残ったイギリスの巨樹の話、  
そして世界で一番大きな樹・バオバブ、  
世界最長寿の樹「メスーセラ」に対する想い。  
本当に“大切なものは目に見えない”という、  
奥の深い自然を守ることの大切さについてお話しいただきました。

# 世界の巨樹から見た自然の姿と 人のかかわり



世界最長寿の樹。アメリカ・カリフォルニアの標高3,000mの山で、4700年を超えて生き続けるプリッスルコーン・パイン。「メスーセラ」と命名されている。この写真は、同じ山に成育する同じ樹種の樹。

## 巨樹めぐりへの道

いまから17～8年前、私は初めて屋久島に行きました。カレンダー制作の仕事で縄文杉を撮ってこいといわれ、当時は自然のことも森のことも全く知らないまま出かけました。30キロもあるカメラバッグを担いで到達まで5時間の登山道を歩きました。登るにつれて疲れも増し、汗をかきかき、ただひたすら狭い登山道を見つめながら、やっとの思いでたどり着きました。

ぐったりと縄文杉にもたれて、少しの間ぼーっとしていました。しばらくすると、風がそよそよと吹いているのがわかるんですね。汗が乾いていくのがわかる。ああ、鳥が鳴いている。ときどき鹿がやって来て、ざわざわっと森が動いているのがわかる。そのとき初めて、自分だけが生きているのではなくて、自然の中に自分があるんだ、ということを実感できたんです。とても明るい気持ちになりました。そんな気持ちの中での帰り道は軽やかで、こんな旅だったら、これからも続けようと思いました。これがきっかけとなって、巨樹を撮ろうと決めたのです。

最初は日本の巨樹を撮っていましたが、銀座の富士フォトサロンで開催した写真展でのひとつの出会いが、世界の巨樹めぐりへとつながっていったのです。長年闘病生活をして外での風景を見ることができなかったという女性の方が、「昨日病院を退院してきたばかりですが、これほど街路樹の緑がきれいだとは思いませんでした。ケヤキの新芽の美しさを見て、生きてよかった」と何度もおっしゃるのを聞き、こちらの方が心を打たれました。街路樹で生きてよかったと言われるくらいなら、自然の中の巨樹を撮る何かの価値がもっとあるのではないかと思い立ち、世界中の巨樹を訪ねることにしました。これが私の巨樹めぐりのきっかけです。

## ハイダ族の森 ～トラップラインの教え

自然環境の保護となると、人とのかわりを避けて通れません。世界各地を回ってきましたが、まず自然と人がもめたところから話してみたいと思います。

青森県の三内丸山遺跡をご存じだと思いますが、ここに大きなクリの柱が立っていたそうです。それが何のために立てたかわからないところが多い。三内丸山遺跡の沖には黒潮が流れています。それがたどり着くところは

カナダなんです、この地域に住んでいるのが、ハイダ族といってモンゴリアンなのです。ハイダ族と縄文人とは、太平洋を挟んで同じモンゴロイドの系譜ではないかと感ずるところがあります。三内丸山遺跡では5000年前から人が住んでいたようですが、このハイダ族は7000年前からいました。ここにはトーテムポールに自分の家系や物語を彫って表す風習を持っていました。また、亡くなった部族の長の遺体をポールの上に置いて風葬に近いモーチュアリイ・ポール(墓棺柱)を行う。ハイダ族の巨木文化の生活は40～50年前になくなってしまいましたが、梁とか柱、カヌーが奥深い森の中にいまなお残っています。

この地域にはサケが遡上しますが、不思議なことにサケが遡上する川治いに限って巨樹が残っているのです。当初なぜかわからなかったのですが、それはクマの生態に関係しているのです。クマはすごいグルメで、5種類のサケの中でもキングサーモンなどが好物です。そのサケが上がってくるところへ行けば、だいたいクマに会えます。クマがサケをくわえたまま森の中に入って食べると、食べ残したサケの養分が木の根元の土に残るわけです。木の成分を調べると、山にはない海にしかない成分が検出されるんだそうです。ということは、この巨樹の森はクマがいなければ成立しない。サケがいなければ成立しない。それから川がなければ成立しない。あるいは豊かな海がなければ成立しない。どれひとつを切り取ってもこの森はうまくいかないのです。

1970年代にカナダ政府がこのハイダ族の地域を新たに国有地として指定しました。そのときハイダ族の人たちには所有、プロパティという概念がなく、特に異論は出ませんでした。でも、日本の巨樹を見て回って感じたことですが、当たり前ですが巨樹の所有者がいるんです。驚きでした。

森林を管理するにあたり、カナダ政府は伐採許可を出す際、サスティナブル・イールド(Sustainable Yield)の考え方を取っています。たとえば3%の成長率であると、1%クリヤーカット(皆伐)するのであれば永続性が守られるといった考え方です。たまたまその伐採許可がハイダ族の先住民の森の一部まで指定されてしまったのです。

ハイダ族は所有の概念はないけれども“トラップライン”という考え方を持っています。



本講演は、去る6月1日、経団連会館にて開催された2005年度定時総会後に行われた。

つまり、罠をかけて獲物を捕るが、自分が食べる以上は捕らない。エルク(鹿の仲間)が食べるように捕らなければならないという掟があるのです。エルクの食べ方は草や新芽を大雑把に食べて、食べるものと残すものとを上手に選んで、次の世代に譲り渡すような食べ方をします。ハイダ族の人たちはこのトラップラインの仕組みを受け継いできた。そのため伐採許可をめぐって、カナダ政府との間で裁判にもなりました。結局、ハイダ族の森と伐採対象の森とをきちっと区分することで落ち着きました。

しかし僕は、ここに大きな問題があると思いました。自然のままの森は、人が入れれば守っていかなくなる。しかし人は木材がなければ生活していけない。そうするとアグリカルチャーとしての林業と、自然のままの森の保護とは、なかなか噛み合うステージとならない。こうしたことを理解したうえで森林管理が必要であることを、ハイダ族の出来事が教えてくれていると思います。育てる森と守る森とは全然違います。森というのは微妙な関係で成立しているうえ、自然の仕組みのことはまだ十分にわかっていないだけに、それらをもっと理解する努力が必要です。

## 森の生態系の仕組み ～山火事とカミキリムシとリス

そんな森の中の微妙な生態系の仕組みについて話をしておきます。アメリカのセコイア国立公園にあるジャイアントセコイアの巨樹、シャーマン将軍(樹高83.82m、幹回り25.3m、推定重量2,500t、樹齢2700年)を例に話します。

この森は、山火事とカミキリムシ、そしてリスがいなければ成立していきません。セコイア・ギガンティスというこの木は、火事で球果が焼かれ、はじけて地上に落ち、カミキリムシやリスが食べないと発芽できない。この森が



永続するためには、この3つの仕組みがうまく働かなければなりません。国立公園の先駆けとして活動したジョン・ムーアなどによって、この森の仕組みを生かす工夫が確立されて、ヨセメテ国立公園一帯の森が今日まで守られてきたと思います。

そうした知恵を受け継いでいるアメリカの自然保護ではありませんが、歴史的には失敗から得られたものも多いようです。たとえば昔はクマを見せるのに、馬車の後ろに餌を撒いてクマを寄せ付けるとというのが1900年代初めの自然公園のやり方だったのです。しかし、いまはそのようなことはしない。いかにわれわれが森の中に入れてさせていただくか、という考え方に変わってきています。

## 所有することで守られた森 ～ナショナル・トラスト

次に所有するということによって守られた森の話をしたい。イギリスはかつては木材の

輸出国でした。いまや森林率がわずか10%の国としては信じられないことです。この国の巨木の多くはイチイかオークです。イチイがなぜ残ったのか。ひとつは戦争です。イチイの木は弓矢にすると毒矢にもなるそうで、主に教会に植えられています。イギリスではこうした巨木や森が、ナショナルトラストという、所有するという概念で守られてきた例が多い。

その一例として、バルフォア伯爵家が所有する樹齢1000年を超えるイチイの巨樹を紹介します。このイチイの老木は、枝が幾重にも垂れ下がっていて、枝張りは4,000m<sup>2</sup>に及び、樹の中に入るとまるで森の中に入ったようになります。そしてまた樹の心臓を見ているような気分になるのです。なぜだかわかりませんが、このイチイの木の中に入ると、涙が出てきて止まりませんでした。写真から想像してください。

イギリスで一番大きな樹齢1500年といわれるオークの巨樹も個人所有で、ここでは

入場料を取っています。写真を撮るとき、さらにオーナーを入れて撮るとき、

料金を上乗せして請求される。日本でも入場料を取ったり、また巨樹を守るために柵で囲ったりする場合がありますが、それも含めて所有することによる保護で守ることができれば、また人に教える何かが生まれれば、それでいいんじゃないかと思います。

## レバノンスギの森 ～日本人樹木医が救った

レバノンスギは聖書に103回も登場してくる木です。クフ王のピラミッドの墓に納められている太陽の船の遺跡もレバノンスギでできていますし、レバノン最大の古代遺跡パールベック宮殿で使われたのもこの木です。最後に残されたレバノンスギの森アルゼラブ(神のスギの森)はわずか数ヘクタールにすぎなくなってしまいました。この森がレバノンの国旗になっている。この森は政府の管轄下にありますが、松くい虫で途絶えかけていました。現地での森を救ったのが日本人であると聞き、改めて感激し本当にうれしく思いました。広島樹木医で我 晃司さんという方がレバノンスギを救ったのです。当初地元政府はそんなわけもわからない者に、自分たちの国旗にもなっている森の手当てを任せられないと断って歓迎されませんでした。木に薬剤は注射するし、ホッチキスでラベルを貼るし、根は掘り返すし、ということで相手にされなかったようです。しかし、樹勢が回復するにつれて、我さんの仕事ぶりがわかってきたそうです。

海外のNGO活動で植樹をしている例はよく聞きますが、樹木や森の治療と救助に行っている例はあまり聞きません。日本の林業技術や植物学などは進んでいるのですから、日本人がもっと海外の森や樹木を助けるために活躍してほしいと思っています。

## マダガスカルのパオバブ ～村の文化を守る

パオバブはサンテグジュペリが書いた『星の王子さま』でおなじみです。この物語では、パオバブは大きくなったら星を食べてしまうから小さいうちから芽を摘んでしまえと邪魔者扱いされています。そして「大切なものは目に見えない」という、社会への戒めともいえる言葉を伝えているのがとても印象的です。世界中のいろんな森を見てきましたが、自然界でも大切なことは目に見えない、まだわかっていないことが本当に多いと思います。もっともっと目に見えていない自然界の研究を広げてほしいと思っています。

世界で一番大きな木は何かといえばパオバブで、幹周り45mという木が南アフリカのジンバブエ国境近くにあります。パオバブの樹型は根株が逆さまになったように見えますが、理由は乾燥した暑さに耐えるために乾季には葉を出さず、こんな形の木になってしまったのだそうです。幹を削ると中から光合成をす



イギリスのバルフォア伯爵家が所有する樹齢1000年を超えるイチイの巨樹。枝張りは4,000m<sup>2</sup>に及び、樹の下に入るとまるで森の中に入っているように、樹の心臓を見ている気分になる。



世界最大の樹。南アフリカに育つバオバブで、幹周りは45mもある。

る層が出てくる。葉に代わって樹皮下光合成をしているのです。

約2～3億年前、南半球には超大陸・ゴンドワナ大陸の時代があり、その中心地がマダガスカルだったといわれています。また、世界で8種類のバオバブの木が、かつてはこの地域に広く分布していたともいわれます。かつてマダガスカルには、身長2mに及ぶ大型の鳥エピオルニスが生息していました。この鳥は200年位前ニュージーランドで絶滅した有名なジャイアントモアに似たかっこうをしています。この鳥がバオバブの実を食べていたようです。バオバブの実は動物に食べられて排泄されてからでないと発芽が難しい。したがって、エピオルニスの絶滅によって、バオバブの生態的循環が切られてしまったわけで、このこともバオバブの生息域が限られるようになった原因であるのです。

マダガスカルにはバオバブの美しい並木がありますが、これがいま問題となっています。マダガスカルの主食は米で、貧困対策のため米の増産政策がとられており、一帯がどんどん田んぼに変わりつつある。生育環境が変わってしまったことで、バオバブがあちこちで衰弱しているのです。

部族長シャーマンが守っていた聖木サクレのバオバブが枯れて倒れてしまったことがあります。そこでシャーマンは森にある小さなバオバブを選び、村の新しいサクレとするために、周りを下刈り手入れして、新しいバオバブに魂を宿す聖木への儀式を行いました。聖なるバオバブが倒れることによって、ムラ社会の文化が守られてもいるのです。そこでは、

村の大人たちによる自然とのかかわりの儀式を、子どもたちが一緒に見守りながら自然を学んでいる。こうした風習を続けることで、自然と付き合いながら自然が守られていく。自然と人の関係にとって、とても大切なことだと感じました。

## 世界最長寿の木 ～樹齢4700年の「メスーゼラ」

地球上で現在最高齢の樹は、未公認ですが、タスマニア林野庁の男が探し続けたヒューオンパインの1万1000年の樹があります。また、クローンの集合体の森としては、遺伝子のDNAを調べて確認されていますが、同じくタスマニアで林齢4万年といわれる灌木の森も見つかっています。

現在、ひとつの固体として公認された最長寿の樹は、プリッスルコーン・パインだとされています。1958年2月号の『ナショナル・ジオグラフィック(National Geographic)』に、年輪年代学の権威のDr.シュールマンが、樹齢4700年の樹を発見したことが発表されています。カリフォルニアの標高3,000mのホワイトマウンテンというところで、プリッスルコーン・パインの立枯れ状となった木を調査し、4,768の年輪を測定して立証、「メスーゼラ」と命名しました。このマツ科の木は立ち枯れ状になっています。樹木は細胞分裂をして成長していきますが、ある程度大きくなると細胞分裂ができなくなり老衰化していく。部分的に枯れながら、一部の細胞組織が受け継ぎ、代わって生き続けるのです。

年輪年代学からは1万年位前までさかのぼって気温や日照の推移など、気象の歴史を紐解くことができます。いまから200年前の時代、ロンドンのテムズ川が凍って馬車があるの上を走っている絵がありますが、そんな過去の気象状態をこの年輪年代学は正確に立証してくれてもいます。

「メスーゼラ」と命名された世界最長寿の木は、保護のため場所が明らかにされていません。そこで私は『ナショナル・ジオグラフィック』に掲載された写真をもとに「メスーゼラ」が生き続けている山の中を探し歩きました。山を歩き続けた結果、偶然ですが、幸いにも世界最長寿の樹を見つけることができました。その時の感動はいまもって言い表せません。「メスーゼラ」に出会うまでは、神々しいとか、力強いとかいったイメージを想像していましたが、その世界最長寿の樹はほんとにちっぽけで、なんでもない木でした。でも、そこには大きな価値があるのです。「大切なものは目に見えない」という言葉の深さを、世界一の長寿の樹から教えられたのです。

世界の森を歩き続けてきましたが、自然界にはまだまだ「大切なものは目に見えていない」ところがいっぱいあるということをも肌で感じているところです。

これからも地球上の森を撮り続けて、自然の奥深い、目には見えない大切さを伝えながら、自然を守るための活動を続けていきたいと思っています。



### ●よしだ・しげる

1958年東京都生まれ。広告、雑誌、PR誌などの仕事のかたわら、90年頃から巨樹を中心に自然写真を撮り続けている。全国カレンダー展において、通商産業大臣賞、大蔵省印刷局長賞などを受賞。デジタル写真の分野でも先駆者として活躍している。主な著書に『地球遺産最後の巨樹』(講談社)、『千年の森へ』(共著、アスペクト)などがある。



# 企業とNGOの交流会

## 企業とNGOの懇親パーティー＆「公益法人制度改革と寄付税制の見直し」に関する意見交換会

去る7月27日、経団連会館において「企業とNGOの交流会」を開催いたしました。

この会は、自然保護協議会会員企業の皆さんや自然保護基金へご寄付をいただいた法人・個人の方々、自然保護に活躍しているNGOの方々との交流を図ることを目的に、毎年開催している懇親パーティーです。

なお、今回は懇親パーティーに先立ち、日本NPOセンター副代表理事の山岡義典氏(法政大学教授)を講師にお招きし、企業とNGOがともに出席して「公益法人制度改革と寄付税制の見直し」に関する話題をご提供願い、意見交換会を行いました。

## 交流会懇親パーティー



大久保尚武自然保護協議会会長によるご挨拶。

### 交流会は「Face to Face」で

交流会懇親パーティーでは「Face to Face」をテーマに、企業とNGOから170余名の方にお越しいただきました。今回は例年以上に大勢の方々にお集まりいただき、とくにNGOの方には、はるばる南は屋久島、北は知床から参加していただきました。

一番の遠距離から来ていただいた、NGOの「屋久島うみがめ館」の大牟田一美代表、「知床ナチュラルリスト協会」の藤崎達也代表から



挨拶に聞かせる企業とNPOの皆さん。この後、和やかに歓談が行われた。

は、ともに世界自然遺産になったこともあって、世界遺産登録後の観光客増に対応する心構えや日頃の自然保護活動の体験談について報告していただきました。

さらに、大久保尚武自然保護協議会会長(積水化学工業株式会社社長)からは、日本経団連自然保護基金に寄付のご協力をいただいている企業や個人の方々へのお礼の言葉とともに、海外・国内の自然保護に献身的に活動しているNGOの人たちへの労いをこめ、ボランティアによるマングローブ植林が津波災害防止に効果があったことなどを引用、NGO活動の成果と意義に触れつつ、自然保護協議会の活動をさらに活発化していきたい旨の挨拶がありました。

### 企業とNGOとの新たな協働へ

この1年間、協議会では企業とNGOの交流の場づくりに努めてきたところですが、相互に共通の話題や体験が増えてきているように思っています。

懇親パーティーの場では、NGOの人たちが活動報告のチラシを持参して、企業の人たちに熱心に状況説明をしていました。なかには企業とNGOの間で、企業の技術力や製品を生かして協働を実現しようとする話し合いなどの様子も見られました。

企業とNGOが熱心に語り合ったことが、これから先少しでも具体化して実っていくこととなれば、事務局としてもうれしい限りです。

## 意見交換会

### 「公益法人制度改革と寄付税制の見直し」

講師：山岡義典  
日本NPOセンター副代表理事

NGOへの支援に関する税制の見直しについては、「日本経団連自然保護宣言」の行動指針に明記されており、今年度の協議会の活動方針として取り組むことで進めています。そこでまずは現状認識のため、日本NPOセンター副代表理事の山岡義典氏から話題提供をお願いし、意見交換会から始めることにしました。意見交換会には、自然保護協議会企画部会のメンバーとNGOから13団体が出席しました。

### ●非営利組織の枠組み

公益法人制度改革が議論されている。その基礎となるのは法人制度だが、法人の枠組みづくりと同時に、それにどのような税制を組み立てていくのが課題となっている。いまそれらがどう動きつつあるのか、どういう問題があり、どう対処していくのかについてお話ししたい。

日本の非営利組織を理解するには、3層構造であることを知ること。日本の非営利セクターには、まずは①社団・財団法人などの公益法人があって、これは民法34条に規定されている。主務官庁による設立許可とその後の監督があり、いろいろな税制上の措置があって安定した組織経営ができる。次に②官庁から一切制約がない任意団体は、各々規則を持って定常的な活動を続けているものの法人格は持っていない。そして③NPO法人は、1998年に特定非営利活動促進法ができ誕生した。これができるまでは、包括的な



分野を含む非営利組織は、公益法人と任意団体の二つしかなかった。

## ●非営利組織の現状と問題点

公益法人は現在約26,000弱で、新しい設立を厳しく制限し、一方で休眠団体を解散させているので微減傾向にある。公益法人に対する税制優遇は主に4つある。(イ)指定33業種の収益事業以外は原則非課税。(ロ)収益事業を行った場合、通常30%の法人税に対し22%の軽減税率となっている。(ハ)収益事業の一定の限度額を公益的の事業に使った場合はみなし寄付とされ寄付金控除が受けられる。(ニ)金融資産収益に対して20%の税がかからない。また公益法人には特定公益増進法人制度があって、寄付金控除や所得の一部が寄付金控除になり、企業の場合は一定の範囲内で損金算入できる。特定公益増進法人は公益法人の約3.5%の900弱あり、新しく認定されることは極めて限定的である。

NPO法人は所轄庁の認証制度により、現在約22,000団体と急増中。その後、さらに認定NPO法人制度を作った。認定されると寄付金控除を得られるが認定を受けるのは極めて難しい。少しずつ改善されてきたが現在では40団体に満たない。また、任意団体は全国に10万団体くらいあると推測される。例外的に指定寄付金制度が適用される以外に寄付金控除はない。

80年代には、市民活動の台頭に伴って、新しい非営利法人制度の必要性の議論が起こった。公益法人制度ではなじまなく、任意団体では困るという事態が生じてきたからだ。このことはNPO法人設立運動でほぼ解決した。しかし現在の公益法人制度には、本来なじまない共益団体(社会のためにというよりメンバーシップの利益を考える団体)が含まれている。とはいえメンバーシップ制でも社会全体の基盤を作るということであれば公益となるわけで、共益か公益かの判断が難し

いわけだが、最近では設立許可が難しくなっている。NPO法人も公益を前提としており誰でもメンバーになれることになっており、メンバーを限定する共益型の団体はNPO法人になれない。そのため新たに中間法人制度を作った。現在1,000団体が生まれている。

## ●公益法人制度の改革に向けて

以上のようにいろいろな対応がなされてきたが、公益法人制度自体に非常に問題が多く、抜本的な改革が動き始めた。なぜそういう改革が必要になったのか。主務官庁による設立許可や監査が必要で、許可は官庁の裁量次第でもある。公益法人制度が不透明な公金の流れを作り、それが天下り人事とも絡んでいる。いずれ日本の将来のネックになるからだ。

2002年、「公益法人制度の抜本的改革に向けての取り組みについて」という閣議決定がなされた。その後、03年6月には基本方針が、04年12月には基本的枠組みが閣議決定された。公益法人制度改革は行政改革推進事務局で行い、それに伴う税制の改革は国の税制調査会が行う。04年12月の基本的枠組みの閣議決定をうけて、05年4月から税調が本格的に取り組み始め、この6月に「新たな非営利法人に関する課税および寄付金税制についての基本的考え方」をまとめた。

閣議決定による改革案の中身は、公益法人と中間法人を一緒にして「一般的な非営利法人」を作る。登録制度とし登記だけで「一般的な非営利法人」に移行できる。さらに第三者の審査機関により「公益性のある非営利法人」を認定して税制優遇等を与えようというもの。これはイギリスのチャリティーコミッションを参考にしている。この枠組みを二階建てと称しており、一階は原則課税、二階に行けば原則非課税で税制優遇を与えるというもの。当初NPO法人も含めてこの枠組みにする案もあったが、現行のNPO法人制度は、

収益事業について課税されるものの原則非課税の制度であり、新しい考え方ではこれがなくなるおそれもあり、反論が根強くこの枠組みには入っていない。

今回の税調の方針は、二階に上がれば寄付金控除も与えようという点に特徴がある。仮に寄付金控除を与えたとすれば、どんな団体でも二階部分に上げるわけにはいなくなるだろうし、一階部分は原則課税になるとしたら問題が大きくなるのが考えられる。そこで私は、「一般的な非営利法人」を1種・2種の二つに区分し、「第1種」は原則非課税にすべきと提言している。「第1種」は解散したときに財産を分配できないことにし、特定の要件を満たせば第三者の審査機関による認定によって二階部分に上がることができる。「第2種」は解散したときに財産を分配することができるようにするが、原則課税とし、二階には上がれないこととする。その場合、中間法人は自動的に「第2種」で課税対象になる。公益法人はいま原則非課税だが、今の政府案で二階に行けないと原則課税となって問題が大きい。二階に上がるのはある程度厳しい判断を必要とした方がいい。そのためにも、一階にあっても一定の要件を満たせば原則非課税となる仕組みを作っておくことが重要だ。

順調にいけば、来年度の通常国会には公益法人制度改革が具体化して法案が提出されると見られるが、税制については法人制度の枠組みが固まってから後のことで、いまだ流動的である。

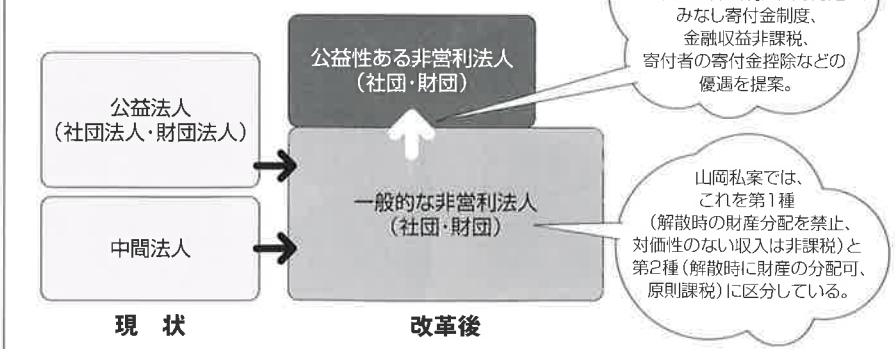


## ●やまおか・よしのり

1941年生まれ。トヨタ財団で研究助成や市民活動助成で新しい領域を開拓。97年日本NPOセンター設立とともに常務理事・事務局長に就任、現在、同副代表理事。01年度から法政大学教授。著書に「日本の財団」(共著)、「NPO基礎講座」NPO実践講座」などがある。

## 閣議決定による改革案の概念図

(吹き出し内に山岡私案を記載)



## ■連携の背景

積水化学工業株式会社は、今年からNPO法人メダカのがっこうと連携し、田植えから稲刈りまで、田んぼでの活動を通じて、従業員の自然保護や環境問題に対する意識向上を図ろうとしている。

同社は日本経団連自然保護基金(KNCF)を通じ、NGOへの支援を続けているが、その中から毎年「水と森」に関連したプロジェクトを5件ほど選び、互いに連携して活動を行うこととしている。しかしこれまでのところ、この活動は従業員に十分認識されているとはいえないようである。同社環境経営部では、せつかくの活動を広く知ってもらおうと、新たに従業員を巻き込んだかたちで、浸透を図りたいと考えている。そのひとつが今回のメダカのがっこうの「環境学習『田んぼから自然環境を学ぼう』」で、3回シリーズ(田植え、草取り、稲刈り)を予定している。

筆者は、事務局の一人として5月に行われた田植えに参加。栃木県の茂木町にある谷津の棚田で、従業員およびその家族34名が田植えを体験した。

## ■「冬・水・田んぼ」を提唱

メダカのがっこうは冬季湛水、不耕起農法の普及推進をめざす団体で、年間を通じて田んぼに水を入れること(冬・水・田んぼ)で、生き物いっぱい田んぼを広げようと、協力農家を求め全国各地で普及活動を行っている。福島県郡山市ではこの「冬・水・田んぼ」で白鳥が集まるようになり、町の名所にもなっているところもあるようだ。KNCFでも2005年度、佐渡島でトキの生息地環境を取り戻すための不耕起農法推進プロジェクトを支援している。

## ■棚田で田植え体験

今回の現場である棚田は「ハッチョウトンポの棚田」と呼ばれ、絶滅危惧種のハッチョウトンポの生息地である。しばらく荒れるがままに放置されていたものを、再び手を入れて復元し、昨年からの田植えを再開したところである。

ほとんどの参加者が田植えは初めてで、最初にメダカのがっこうのスタッフから苗の植え方の指導を受けた。田んぼの両端に糸をはり、印のついた部分を目安に数本の苗を指の関節程度にしっかり差し込むなど、丁寧に説明をしていただいて、いざ開始。子どもたちは最初は恐る恐る田んぼの中に入っていたが、慣れてくると、泥んこになりながら夢中で楽しんでた。

「冬・水・田んぼ」のせいだろうか、驚いたことに、田んぼの中にはオタマジャクシや孵ったばかりのカエルだらけで足の踏み場にも困るほどだ。その他、タガメやイトトンボなど普段見ることがない生き物が数多く見られた。

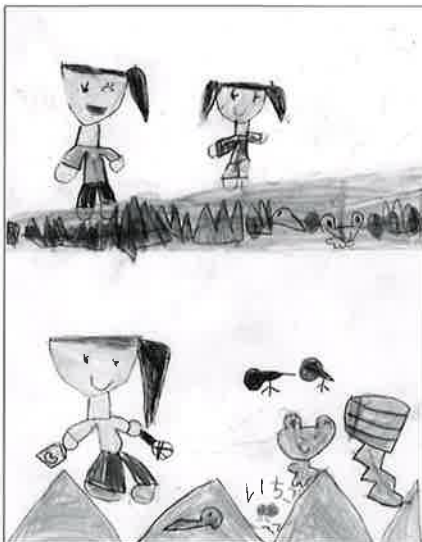
2時間弱で田植えはスムーズに終わり、結局、7枚の棚田に苗が植えられた。子どもたちは、その後“生き物先生”の林 鷹央さんから、田んぼに棲む生き物について教えていただき、観察したりして楽しんだ。

午後からは『みんなで話そう、今日の体験から感じたこと』として感想を聞かせていただいた。「NPOの活動を身近に感じることができた」「生き物に目を輝かせて、子どもがとてもイキイキ作業をしていた」といった声が聞かれた。最後はメダカのがっこうの中村陽子理事長から、田植えから学ぶ自然と人間のかかわりについて「冬・水・田んぼ」の重要性を伺った。

今後の予定は、7月に草取りと生き物調査を、9月には稲刈りを行い、その後、収穫されたおこめで食事会をする計画である。一年を通じた活動で参加者がどんなことを感じ、また自然環境についてどう意識が変わっていくのか楽しみである。



栃木県・茂木町にある「ハッチョウトンポの棚田」で行われた田植えの様子。



田植えに参加した、高橋柚実子ちゃんが描いてくれた絵。ヘビやカエル、オタマジャクシなど生き物がたくさんいる様子がわかる。

# 活動

## ボランティア活動体験記

近頃、企業では従業員が自然保護や環境問題に対する意識向上を目的としたボランティア活動が盛んに行われるようになってきました。今回、事務局で参加した2つの企業のボランティア活動について体験報告を行います。



# 企業の 自然保護

## ■年々活発になる活動

去る7月2日、三菱電機株式会社のボランティア活動「自然保護入門 体験活動 第5回富士山植林・育林参加ボランティア活動」に参加した。

同社は3年前より住友林業株式会社との協働で、富士山麓の「まなびの森」で育林ボランティア活動として、毎年2回、補植や下草刈り、枝打ちなどを行っている。

当初、17名の参加で始まった活動も、今回は45名が参加。しかも、その6割が初参加であり、ベテランから若手まで年齢層も広く、女性の参加者も多い。また、総務や環境関連のスタッフばかりでなく、営業、工場、関係会社の方々などバラエティーに富み、年々盛んになってきている様子である。活動が活発になってきた理由を社会貢献担当の相澤邦雄部長は「住友林業という最高のパートナーに恵まれ、生みの親や幹事の皆さんの熱心さによって広まってきた」と話される。

## ■富士山麓での植林・育林活動

「まなびの森」は、1996年秋の台風で大きな被害を受けた国有林の被害跡地を元に戻そうと、住友林業が林野庁などの協力を得て、市民ボランティアを募集し、90haの土地に植林活動を行ったことから始まる。

植林活動自体は37haに約6万本を植えることで2003年度にひと段落したが、「樹木の成長は子どもの成長と同じ」といわれ、その後の育林活動に手間がかかる。ススキなどは放っておくと2m近くにも成長して日光を遮り、植林された小苗の成長を阻害するため、5年程は丁寧に下草を刈る必要がある。またシカなどの食害を防ぐためにツリーシェルターでカバーするなど、地味だが大事な活動がある。

## ■楽しく自然保護体験を行う

“生みの親”こと、佐藤正之さんは相澤さんの前任の社会貢献担当部長。日本経団連自然保護協議会と社内ボランティアについて相談して「まなびの森」での育林活動を始め、定年後の今も育林ボランティアに参加されている。また、事務局である環境推進本部の太田完治さん、山本美奈子さんらが中心になって、約4000人の本社ビル勤務者に案内し、近隣の事業所とも連携をとるなど、社内の巻き込みを積極的に進めた。

今回は入門編として、「身の丈にあったもので、広くボランティアの機会を提供する活動と位置づけ、楽しく自然保護体験を行う」ことと

し、帰りには温泉に寄ることも計画の中に入れた。こういった点も参加者を集める魅力につながっているのではないだろうか。

## ■汗びっしょりになっての下草刈り

さて、当日は前日からの雨が心配されたが、降られることもなく、時折富士山の山頂が顔をのぞかせる、絶好の下草刈り日和となった。バスの中では「まなびの森」の活動や、森林の大切さを解説したビデオを見て、事前知識を入れた。

現場は富士山南麓の二合目、標高1,000mの場所にあり、フォレストアークという施設棟で管理者の金森正巳さんから草刈鎌の使い方など注意事項を受け、現場へ向かった。三菱電機の育林ボランティアは毎回決められた場所で行われているので、参加するたびに植樹された木がどれくらい成長したかよくわかる。ツリーシェルターから顔を出している樹木も数多く見られるようになってきている。

皆さん黙々と、手際よく作業され、何事もまじめにやる三菱電機の社風がよく出ているようだ。午前・午後合わせて2時間半、汗びっしょりになって作業を行い、辺り一面、下草がきれいに刈り払われた。

帰りの車中では参加者の皆さんから「達成感があってよかった」「気持ちのいい汗をかくことができた」「次回も参加する」などの感想を聞くことができた。

回を重ねるごとに、ますます盛んになっていく育林ボランティア活動。次回もさらに充実したものになっているだろうと実感した。



成長してツリーシェルターから顔を出す「フジザクラ」。



7月2日に行われた「富士山植林・育林参加ボランティア活動」に参加した皆さん。

## Kukup島内・周辺における 地域住民向け環境教育 および生物多様性保全計画の開発

Wetlands International-  
Asia Pacific Malaysia

### ■活動の背景

事業対象地のマレーシアKukup島は800haの干潟に囲まれた、マングローブが豊かに生い茂った島で、1923年にPermanent Forest Reserveに、97年にJohor National Park Corporation (JNPC) 管轄下の州立公園に、また2003年にはラムサールサイトに指定された。生物多様性に富み、マレーシア本土からの観光客も多い。しかし、土壌浸食、浮き籠漁業による水質汚染、プラスチック袋などゴミの直接投棄による汚染に直面している。

JNPCは情報教育センターを設け、エコツーリズムを念頭において木道や吊橋の整備を行ったが、内容が整わず、スタッフも未熟な状態である。そこで、住民ならびにビジターに環境教育を行い、エコツーリズムに資するために教材を整え、スタッフの教育などを行うこととした。

### ■Wetlands International- Asia Pacific Malaysiaとは

87年、Asian Wetland Bureauとして設

立。95年、3つの組織が統合されてWetlands International-Asiaが誕生し、現在の姿となる。

科学的知識に立脚した環境保全と湿地、種、生息地、水資源の持続的な利用に注力。クアラルンプールに拠点を置き、南アジア(拠点はニューデリー)など7つの地域プログラムを持ち、これまで約100のプロジェクトを実施してきた。

### ■2004年度の活動状況

04年度の活動状況は以下の通りである。

①Kukup島における水鳥の生態調査を3回行い、2種の希少種を見つけるなど生物多様性の情報を更新した。

②マングローブの生態的、経済的、社会・文化的な面での重要性を認識させるポスターや小冊子を、マレー語と北京語で各2000部作成。これをJNPCに渡し、ビジターセンターで展示したり、観光客に手渡したりできるようにした。ウェブサイトで閲覧できる英語版や、ビジターセンターで見られる映像も作成。また、JNPCと協働で「世界湿地デー2005」を実施し、アートコンテストなどを主催した。

③学生向けに環境学習活動集を500部、マレー語と北京語で作成した。ここでは、マングローブ林に生息する動植物、マングローブの役割などの紹介とともに、マングローブ保全に関する情報も記載されている。また、マングローブ林域において環境学習に活用するための教師用ガイドブックを2カ国語で作成した。

今回、50名の小学生が初めてサイトへの見学会に参加した。学校では、学生に対し、マングローブ保全、環境保全の意識向上のための対話集会やワークショップを開

催した。

④エコガイドおよび湿地管理のための2つのトレーニングプログラムを実施した。エコガイドコースは3カ月間、マレー語および北京語でJNPCスタッフと地域住民に行われた。湿地管理コースは半年間、JNPCスタッフにのみに行った。これらのトレーニングマニュアルは今後、新しいスタッフが入った時に活用できるようJNPCに引き継いだ。(文責 谷口)

\* 日本経団連自然保護基金は、2004年度に270万円の支援を行っています。



サイト見学会に初めて参加した小学生。



見学会の様子を描いた子どもの絵。



# 御蔵島における バンドウイルカの 保全のための啓発活動

## 御蔵島バンドウイルカ研究会

態調査および自然保護、環境保全の啓蒙活動を行うことを目的としている。

毎年7～9月に現地調査を行い、それ以外の期間は東京で分析・広報活動を行う。パンフレット「イルカの棲む島」や小冊子「イルカの棲む島～御蔵島のイルカたち」(海のふれあい賞受賞)を作成・配布、また調査報告会を随時実施している。

### ■04年度の活動状況

同研究会の04年度の主な活動は、以下の通りである。

#### ①データのまとめ

御蔵島周辺に生息するミナミバンドウイルカの個体識別調査を行うため、1994～2003年の10年間にわたって毎夏2カ月間撮影をしてきた。個体識別はイルカの成長過程、社会構成、社会行動を知る手がかりとして重要。それらの水中映像を洗い出し、個体別映像・行動別映像・貴重なシーンといったカテゴリーごとにパソコンへ取り込み、データベースを作成した。

#### ②DVD制作とロケ撮影

御蔵島村の住民、御蔵島イルカ協会、およびボランティアメンバー、現地で活動し、研究のため滞在しているメンバー等の協力により、新たに調査風景、個体識別風景、御蔵島の自然、御蔵島村の生活シーンなどを撮影した。それらと上記10年間の映像を合わせ、DVDを制作した。

内容はメイン映像(30分)でイルカの生態や社会、生息環境をわかりやすく伝え、特典映像(24分)で99頭の個体識別番号・名前を表示して紹介、そのうち20頭については傷など特徴を示したイラストや解説を付けた。

計670枚制作したDVDの内訳は、島で

の配布用150枚、研究会協力者および制作関係者への配布用100枚、先行予約販売用120枚、販売用300枚である。販売用DVDは島内の宿泊施設などで販売するが、その収益金は増版経費や御蔵島周辺海域に生息するイルカの調査・研究、環境保全活動のために使用する予定。

#### ③村民、ウォッチング関係者、観光客に対する啓発活動

御蔵島の村民に、制作したDVD150枚を配布し、島民やイルカウォッチング関係者に野生イルカに対する正しい知識を伝えるとともに、環境保全の意識向上を図る啓蒙活動を行った。また、観光客に対しては、島内の宿にDVDを常備して映像を流してもらい、環境保全の意識向上を図るなどの啓蒙活動を行っている。(文責 谷口)

\*日本経団連自然保護基金は、2004年度に100万円の支援を行っています。

### ■活動の背景

御蔵島は東京から南へ200km、三宅島の南18kmの海上に浮かぶ周囲16.4kmの小さな島で、その周辺は推定200頭ほどのミナミバンドウイルカが生息し、子育てを行う世界的にも数少ない、貴重な海域である。

しかしこの10年、イルカウォッチングブームが起こり、そのために観光客が増え、地域は活性化したが、イルカの生態を無視したウォッチングにより、イルカに過度の負担をかけるようになってきている。地域の持続的発展と自然保護のためには、観光客や住民に野生イルカの社会や生態、御蔵島の海陸の貴重な自然を正しく理解してもらうことが重要になっている。

### ■御蔵島バンドウイルカ研究会とは

御蔵島バンドウイルカ研究会は、1994年発足。御蔵島沿岸に通年生息し、交尾・出産・子育てをしていると思われるミナミバンドウイルカの生態の健全な保護と御蔵島の産業振興とのバランスを保つため、その生



新たに調査風景や個体識別風景、御蔵島の自然や村の生活シーンなどを撮影。



野生イルカの社会や生態、御蔵島の海陸の貴重な自然を紹介したDVD。

## 藤原中学校生が自然保護協議会を訪問

去る5月17日、三重県いなべ市立藤原中学校の藤田倫央君を班長としたメンバー6名が、修学旅行時における「テーマ別訪問学習」として日本経団連自然保護協議会事務局を訪れた。

同校は毎年、修学旅行で東京を訪れるが、その際、1日を「テーマ別訪問学習」とし、グループで訪問先を決めて聞き取りを行い、それらを持ち帰って皆で話し合うことを行っている。今年のメインテーマは「環境」、サブテーマは「内なる環境」とし、自分たちの町や市を「自然を残し、発達・発展させたい」との願いを込めて、未来構築の役に立てようとしている。

藤原中学校は三重県の藤原岳の麓、典型的な里山にある。メンバーの関心はキツネなど身近な動物たちのことが多く、「昔、普通にいた動物たちが減ってきており、環境に変化が起きているのではな

いか」「木が少なくなると動物たちにどう影響が出るのか」といったものが事前質問として出されていた。

当日は、質問に対する回答や協議会のこれまでの活動、支援先NGOのプロジェクト等を説明したが、インド洋大津波の際のマングローブの役割やニホンヤマネを守るヤマネブリッジに興味を感じたようだ。若い彼らが、今回の訪問を機に自然保護活動に興味を持ち続けてほしいと思っている。



## 愛・地球博でパネル展示

愛知県長久手、瀬戸で開催されている愛・地球博の「地球市民村」で、日本経団連自然保護基金・協議会のパネル展示を行った。株式会社損害保険ジャパンのご厚意で、同社の「わいわい掲示板〜損保ジャパンとNPO〜」のブースにおいて、6月27日～7月3日の間、支援



先プロジェクトの紹介写真や活動年表などを6枚のパネルにして展示させていただいた。同ブースでは、環境NGOを中心にさまざまな団体のパネル展示を

1週間単位で企画しており、協議会にもお話をいただき、今回の参加となった。

一般のパビリオンと違い、小・中学生が学校行事で訪れることが多く、トラやオランウータンの写真に興味を持ってもらっていたようである。

愛・地球博は「自然の叡智」をテーマにしており、なかでも「地球市民村」は「国連・持続可能な開発のための教育の10年」の動きと呼応し、「持続可能性への学び」に取り組むパビリオンとして、期間中、国内外のNGO30ユニットが出展することになっている。またトヨタ自動車、富士通、コスモ石油など、企業の展示ブースも備えている。

環境問題が身近な問題とされるなか、一人でも多くの方に訪れていただきたいと思っている。

# KNCF

# News Selections

皆様からの情報をお待ちしています。

日本経団連自然保護協議会事務局  
TEL.03(5204)1697 FAX.03(5255)8367



# 2005年度総会のご報告

当協議会2005年度定時総会は、去る6月1日(水)経団連会館にて開催され、(1)2004年度事業報告および収支決算、(2)2005年度事業計画および収支予算、(3)役員交代につき審議し、いずれも原案とおり承認された。

2004年度事業として、①日本経団連自然保護基金への募金活動が、前年に比し、法人で19社、個人で10件増、金額で190万円上回る1億5988万円となったこと、②04年11月27日から12月3日にかけて大久保尚武会長を団長とする「ベトナム自然保護プロジェクト視察ミッション」が派遣されたこと、③04年11月末から約1週間バンコックで開催された第3回IUCN世界自然保護会議に、阿比留 雄副会長を団長とするミッションが派遣され、ワークショップの設置と基金、協議会活動のプレゼンテーションを行ったこと、④「日本経団連自然保護宣言」のフォローアップとして、協議会ホームページの企業・NGOの交流プラザならびに情報ニーズコーナーの活用や10月に「CSR経営から自然保護を考える」シンポジウムを開催し、NGOと企業によるパネルディスカッションを実施したこと、⑤04年度支援プロジェクトのうち8件の活動について成果報告会を開催するとともに、企画部会メンバーによる現地視察会を2回開催したこ

となどが報告された。

2005年度事業として、①目標額を2億円とする募金活動を積極的に展開する、②引き続きアジアの諸国を対象に支援プロジェクトの視察ミッションを派遣する、③自然保護宣言の具体化にあたってNGOとの連携に一層留意し、企画部会において、企業による環境教育のあり方やNGOに対する寄付金等税制問題を取り上げ検討するなどの計画が承認された。また、当協議会の副会長として、退任される清水建設の三戸靖之専務、王子製紙の渡辺則利専務の後任として、それぞれ小野武彦専務、金丸吉博専務の就任が了承された。

なお、日本経団連自然保護基金関係では、04年度の支援プロジェクトの最終報告が書面にてなされ、05年度分として、134件の応募プロジェクトの中から、60件総額1億5000万円の支援が決定された旨の報告がなされた。以下に、①募金および支援額、②支援事業の種類別内訳、ならびに③支援事業の地域別内訳を付す。

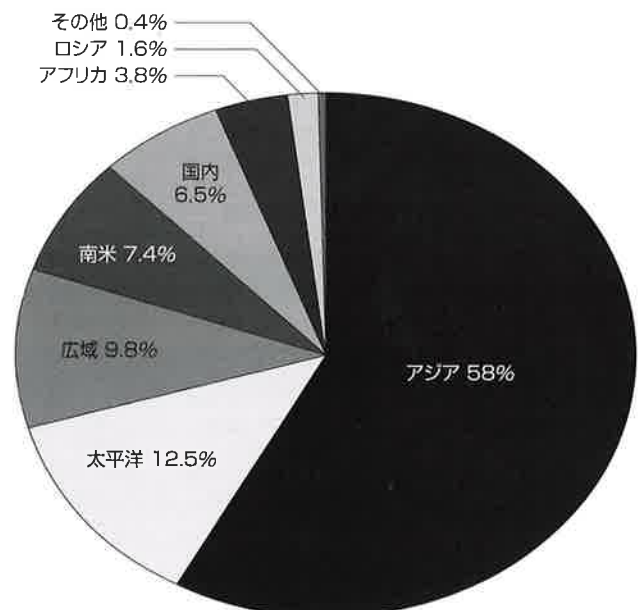
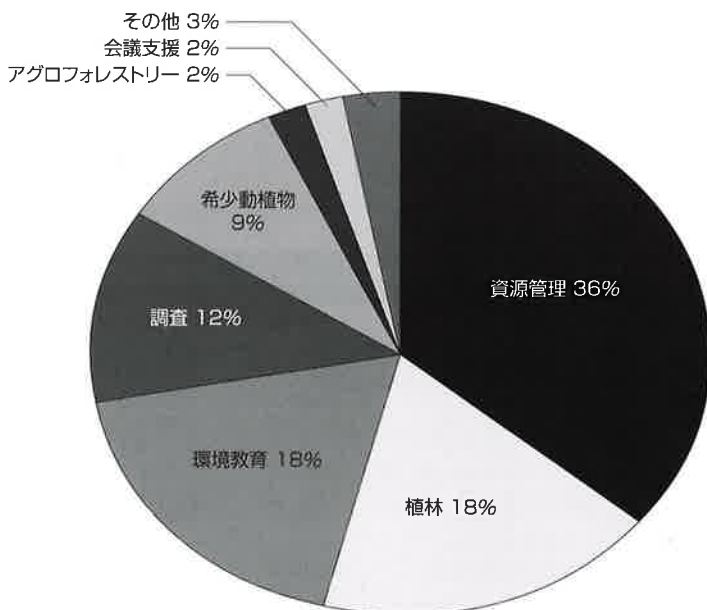
定時総会終了後、世界的な巨樹写真家の吉田 繁氏による世界各地の巨木にまつわる講演を聴取し、盛況のうちに会を終了した(講演要旨は本誌3~6ページを参照)。

## ●過去12年間の活動統計

### ①募金および支援総額

<単位:千円>

	93年~01年	02年	03年	04年	05年	累計
募金額	1,570,363	148,298	157,940	159,875	-	2,036,476
支援額	1,247,217	127,600	139,720	154,600	150,000	1,819,137



②支援事業の種類別内訳

③支援事業の地域別内訳

# ご寄付を いただいた 皆様

2005年6月30日現在

2004年4月～2005年6月にご寄付をいただいた法人・個人は以下のとおりです(順不同、敬称略)

## 法人寄付

(株)アイ・エックス・アイ  
曙ブレーキ工業(株)  
旭化成(株)  
アサヒビール(株)  
味の素(株)  
(株)穴吹工務店  
アメリカンファミリー生命保険会社  
安藤証券(株)  
(株)飯田産業  
(株)イオンファンタジー\*  
伊藤忠エネクス(株)  
伊藤忠商事(株)  
(株)イトーヨーカ堂  
稲畑産業(株)  
岩谷産業(株)  
エイベックス・グループ・ホールディングス(株)  
エスエス製薬(株)  
SMK(株)  
(株)エヌ・ティ・ティ・ドコモ  
(株)荏原製作所  
王子製紙(株)  
大阪製鐵(株)  
岡部(株)  
沖繩電力(株)  
(株)オーディオテクニカ  
花王(株)  
科研製薬(株)  
鹿島建設(株)  
片岡物産(株)  
(株)角川ホールディングス  
(株)上組  
カヤバ工業(株)  
川田工業(株)  
キッコーマン(株)  
キヤノン(株)  
キュービー(株)  
共同印刷(株)  
協和発酵工業(株)  
麒麟ビール(株)  
(株)金羊社  
クインタイルズ・トランスナショナル・ジャパン(株)  
栗田工業(株)  
栗林商船(株)  
(株)クレディセゾン  
黒田電気(株)

(株)コーエー  
(株)小松製作所  
コムシスホールディングス(株)  
佐川急便(株)  
沢井製薬(株)  
三機工業(株)  
(株)サンゲツ  
(株)シーイーシー  
(株)資生堂  
清水建設(株)  
(株)ジャパンメンテナンス  
(株)住生活グループ  
昭栄(株)  
新光証券(株)  
(株)シンシア  
新日本石油(株)  
住友商事(株)  
住友信託銀行(株)  
住友スリーエム(株)  
住友林業(株)  
(株)スリオンテック\*  
スルガ銀行(株)  
セイコーエプソン(株)  
積水化学工業(株)  
(株)セブン・イレブン・ジャパン  
セメダイン(株)  
センコー(株)  
総合メディカル(株)  
ソニー(株)  
(株)損害保険ジャパン  
第一交通産業(株)  
大王製紙(株)  
(株)だいこう証券ビジネス  
大成建設(株)  
大同メタル工業(株)  
(株)ダイナシティ  
太平洋工業(株)  
武田薬品工業(株)  
田辺製薬(株)  
中越バルブ工業(株)  
(株)ディーエイチシー  
帝国臓器製薬(株)  
(株)帝国データバンク  
帝人(株)  
(株)テーオーシー  
鉄道機器(株)  
テルモ(株)  
電源開発(株)  
(株)電通  
テンプスタッフ(株)  
東京海上日動火災保険(株)  
東京電力(株)  
東京トヨタ自動車(株)  
東京トヨペット(株)  
東京貿易(株)  
(株)東京三菱銀行  
(株)東芝  
東芝イーエムアイ(株)  
東陶機器(株)  
(株)東北新社  
(株)東陽

東洋鋼鈑(株)  
東レ(株)  
トーア再保険(株)  
凸版印刷(株)  
(株)巴川製紙所  
(株)豊田自動織機  
トヨタ自動車(株)  
豊田通商(株)  
トヨタ輸送(株)  
長瀬産業(株)  
(株)中村自工  
(株)なとり  
ナプテスコ(株)  
(株)ナムコ  
ニチアス(株)  
(株)ニチレイ  
日揮(株)  
(株)日建設計  
日産自動車(株)  
日新製糖(株)  
(株)日清製粉グループ本社  
日神不動産(株)  
日清紡績(株)  
日東電工(株)  
(株)NIPPPOコーポレーション  
日本オーチス・エレベータ(株)  
日本ガイシ(株)  
日本ヒューム(株)  
日本レコードマネジメント(株)  
日本金属工業(株)  
日本原子力発電(株)  
日本地震再保険(株)\*  
日本水産(株)  
日本証券金融(株)  
日本精工(株)  
日本製紙(株)  
日本大昭和板紙(株)  
日本たばこ産業(株)  
日本電気(株)  
日本農産工業(株)  
(株)ノーリツ  
野村ホールディングス(株)  
伯東(株)  
パシフィックコンサルタンツグループ(株)  
(株)パレスホテル  
(株)バンダイ  
阪和興業(株)  
ビーコンシステム(株)  
日立キャピタル(株)  
(株)日立国際電気  
(株)日立製作所  
(株)日立総合計画研究所  
(株)日立ハイテクノロジーズ  
ビューラー(株)  
富士港運(株)  
富士写真フイルム(株)  
富士ゼロックス(株)  
富士通(株)  
(株)フジテレビジョン  
富士電機ホールディングス(株)  
フタバ産業(株)

北越製紙(株)  
(株)ホリプロ  
本田技研工業(株)  
前田建設工業(株)  
松下電器産業(株)  
松下電工(株)  
三島製紙(株)  
三井物産(株)  
三菱重工業(株)  
三菱商事(株)  
三菱製紙(株)  
三菱電機(株)  
森永製菓(株)  
(株)ヤクルト本社  
(株)山武  
(株)山田洋行  
UFJパートナーズ投信(株)\*  
ユニ・チャーム(株)  
ライオン(株)  
(株)リコー  
菱菱食  
菱洋エレクトロ(株)  
リンナイ(株)  
レンゴー(株)  
(株)ワタナベエンターテイメント

<ビッグフットフォレストクラブ>  
(株)アールシーコア\*  
(株)山崎建設\*  
(株)ビッグフット秀和\*  
(株)高勝の家\*  
(株)ウッドハウス\*  
(株)ビッグフットL\*  
(有)安達住建\*  
(株)藤栄住宅\*  
橋本建設(株)\*  
西永建設(株)\*  
長電建設(株)\*  
吉澤商事(株)\*  
伊藤建設(株)\*  
(株)考建\*  
(株)高橋建築\*  
(株)ビッグフット京神\*  
(株)山本工務店\*  
新生建設(株)\*  
中村建設(株)\*  
ビッグフット互助会\*

<その他>  
「エコ・パートナーズ」(愛称:みどりの翼)  
東京三菱銀行ボランティア預金寄付  
(株)ジェーシービー  
日本信販(株)WAIWAIプレゼント  
(財)トラスト60

\*印は日本経団連非会員企業

## 個人寄付

<p>&lt;個人&gt; 安形哲夫 浅沼健一 足助明郎 阿比留 雄 新井 陽 荒木隆司 井植 敏 井奥博之 井川正治 池田守男 池淵浩介 石坂芳男 石塚義和 伊豆詰次 伊地知隆彦</p>	<p>市橋保彦 一丸陽一郎 出光 昭 伊藤謙介 伊藤住吉 伊藤鷹一 伊奈功一 稲垣紘史 稲葉良規 井上輝一 井上 實 井上雄次 井上雄次 今井恵美子 岩月一詞 上杉貞夫</p>	<p>上田健仁 上原 忠 上原尚剛 牛久保雅美 牛山雄造 内田弘通 内山田竹志 宇野允恭 浦西徳一 遠藤 玄 大木島 巖 大久保尚武 大澤純二 太田 元 大西 匡 大林剛郎</p>	<p>大林芳久 岡部 聡 岡村宏太郎 小川智子 奥田 碩 桶谷 省 小澤忠彦 宇葉啓一 鬼塚喜八郎 小山田浩定 筧 哲男 梶井英二 片山政徳 勝俣恒久 加藤順介 加藤光久</p>	<p>金田 新 川上 博 川島新一 木内 栄 岸 暁 橋高克也 木原 誠 銀屋 洋 久保地理介 熊谷 繁 倉田能達 栗林定友 栗和田榮一 小暮正彰 小西正巳 小林 料</p>	<p>小林陽太郎 駒田邦男 齊藤 潔 坂口美代子 木本 宏 佐々木真一 佐々木 透 佐々木 元 笹津恭士 真田元清 塩野元三 重久吉弘 シゲマツタカシ 柴田昌治 島本明憲 蛇川忠暉</p>	<p>十二町英之 白井芳夫 白水宏典 末長範彦 末松哲治 杉崎盛一郎 鈴木和夫 鈴木 武 スズキトシヒコ 須藤誠一 瀬尾隆史 反町勝夫 平 論 高井正志 田頭秀雄 高橋 清</p>	<p>高橋秀夫 高橋和平 高橋良治 高原慶一朗 高山 剛 瀧本正民 竹内宏允 武田国男 武田忠穂 田口俊明 館 糾 立花貞司 龍村 豊 田中 勇 田中 清 田中健悟</p>
--	--	--	---	---	--	--	--



田中久勝 田中義克 谷口雅保 田保収平 田宮芳彦 長 恵祥 張 富士夫 辻 薫 辻 亨 辻 正道 土屋智義 東郷逸郎 常盤敏時 常盤彦吉 戸塚健彦 豊田章男	豊田英二 豊田達郎 鳥飼一俊 長井鞠子 中川勝弘 長沢誠一 永島陸郎 長瀬英男 中谷 章 長野吉彰 長原萬里雄 永松恵一 中村公一 中村 弘 中村雄二 仲山 章	名取小一 新美篤志 西川由朗 西堤 徹 西野敏克 西野虎之介 西村正史 西本甲介 二橋若雄 丹羽宇一郎 根岸修史 野口忠彦 信元久隆 野見山昭彦 野村高史 橋本 徹	長谷川康司 八丁地 隆 服部哲夫 堀 義一 瀧田松一 早川 勝 林 正 原 宏 樋口廣太郎 久田修義 秀平政信 平井和平 平島 治 平野浩志 平山良明 畫馬輝夫	福井喜久子 福武總一郎 船野龍平 古沼昭憲 古田 武 古橋 衛 堀籠登喜雄 本庄正史 前川眞基 前田又兵衛 榎原 稔 真下正樹 松井秀文 松浦 佐 マツサキタツヒロ 松永隆善	松村雄吾 松本栄一 松本國夫 真鍋邦夫 瀧生英二 三木繁光 水巻武一 御手洗富士夫 三戸靖之 宮崎茂彦 宮原賢次 宮原成夫 宮原秀彰 向笠慎二 村上仁志 村瀬治男	村田嘉一 森 治男 安居祥策 安田友彦 柳井俊郎 山内康仁 山口千秋 山口政廣 山路克彦 山田淳一郎 山本英樹 横井 明 横田 昭 横山 宏 横山元彦 吉田 健(ケン)	吉田二郎 依田 巽 若林 忠 若山 甫 脇村典夫 渡辺捷昭 渡部早苗 渡邊則利 渡邊浩之 渡 文明
---	---	---	---	--	--	---	--

〈ビッグフットフォレストクラブ寄付者〉

二木浩三 矢島繁雄 谷 秋子 上村陽子 川又寛寛 三須宏子 白鳥陽子 濱口洋子 安田秀子 菊地史孝 成毛幸夫 齊藤 一 飯銅浩一 冬賀 理 石川裕美 石田良彦 小宮知幸 今野 光 小曾根秀信 工藤美佳 藤本博幸 池田 均 石井彰宏 小松原孝道 加藤美恵子 林 文夫 大内 隆 野島 毅 来城 徹 加瀬さおり 小山田伸治 神宮司綾子 堀部朝広 河合 透 富山弘之 千葉恭子 井手一孝 吉田忠利 吉田知洋 田畑範行 村田佳津江 蓮本千春 池松直文 平山敏郎 奥田健太郎 三樹 哲	小杉 慎 遠藤英雄 原田喜秀 辻 嘉之 山田 浩 浦崎真人 浅井 忠 庵原晃一 井上大輔 山村健吾 木村 伸 今田浩二 菊池祥一 内藤幸夫 久納孝洋 鎌田大樹 本所宗政 酒井 歩 齋藤茂造 齊藤博明 安島礼子 藤橋あい 瀬下未来子 山本健介 安田健太郎 佐藤洋孝 松本浩司 山下泉一 飯沼紀子 黒田祐子 河内直彦 岡本亜由美 作川憲一 跡路高弘 上地安芸輝 長谷川淳一 松井繁幸 若林 桂 廣井裕治 平野 誠 工藤秀信 濱脇寛子 大川戸悦子 渡邊綾子 記内良之 岡水裕次	平野通洋 遠藤領治 山岸光晴 浅海直樹 有野三雄 岩丸美和子 窪 健充 笠井輝久 河野光邦 山崎法夫 佐藤史恵 佐藤 優 武藤忠士 水戸部正和 岡田泰好 高木智一 浅野目幸広 松倉洋子 伊藤康士 早川美奈 佐々木恵美子 後村善勝 松森孝則 中嶋秀行 鹿島幸恵 佐々木純久 夏堀勝幸 渡辺正喜 加藤貴之 菅原二三夫 南波郁代 成田鉄也 菅野政仁 宗像智樹 長登直子 石森秀典 戸田充彦 半谷貴史 竹内成佳 宮田直樹 蕪木利宣 佐久間 功 佐藤眞奈美 野崎儀憲 宇都宮俊貞 置田 亨	亀川田達郎 林 章司 菊池智司 佐藤宏信 大坪由記子 林 啓太 小林廣一 高野正広 長谷部徳明 小関直人 川原とき子 鈴木美俊子 丑田智彦 歌丸美佳 安部 誠 三上和子 小向 正 鈴木亮一 杉本正洋 齋藤利明 高橋晃樹 高橋隆司 志田雄介 宗像 寛 福原紀子 遠藤隆宏 能藤克治 阿部 宙 肥後健一 地引幸弘 菅家伸一 佐々木 巧 菅野政仁 宗像智樹 長登直子 石森秀典 戸田充彦 半谷貴史 竹内成佳 宮田直樹 蕪木利宣 佐久間 功 佐藤眞奈美 野崎儀憲 宇都宮俊貞 置田 亨	安達正包 坂口 肇 高島みどり 山中政司 笠島健司 中村慎二 近藤孝一 近藤 登 金子千春 中島 健 橋爪直栄 井上広和 大貫不二子 鈴木智史 須田佳代子 西島正彦 橋本時雄 北村里志 斎藤理恵 土田千恵美 多田美奈子 目黒 博 小林孝幸 星野文男 西永 均 久司一隆 角田 俊 月林浩一 室山正英 東 由香 浜尾睦子 坂野 理 宮下和彦 工藤公照 入江光司 吉田 猛 高木敏之 笠原 晃 福田真樹子 石井 充 三澤博史 宮澤智子 宮入俊人 桜井 浩 桜井静香 桃澤ひろ子	岡田暁彦 森本直也 伊藤研介 藤澤美穂 吉田憲史 半田茂樹 竹内園子 伊藤英門 高橋陽一 村瀬周二 岩田明宏 山本博之 園師隆之 高橋伸知 杉本一之 田中亜矢子 服部宏輔 清水 惇 内田信吾 宝木知代 後藤正明 伊藤妙子 松井昭二 野口伊八 富田儒人 宮治 誠 小佐野 賢 大橋政彦 福岡茂樹 神野大輔 黒木崇司 小寺絢一郎 中井朋子 鷺見和広 鬼頭 忍 松井美樹 勝崎香奈 橋本好正 三井 健 石塚健一 清水文裕 木下朋子 小畑年範 田中琴美 常深雅子 筒井幹雄	馬場友美 大谷宏之 須田智彦 庭田隆一 宮田真次 斉藤康二 元岡正彦 見崎義輝 梶田衣里子 村瀬敏彦 高橋裕和 山根清美 吉田里沙 里中伸弘 松葉克之 西井伸晃 森本真人 新井文夫 山崎眞佐子 澤 正明 樋ヶ毅彦 岩越興二 高田直司 北脇照樹 紺野風子 前田仁司 酒井由雄 大藪栄子 嶋田剛司 高橋麻子 合田 智 川口真鋪 清水寛美 樋本 隆 西本豊美 奈良 隆 清川賀仁 山中邦夫 中山 豊 山本景呉 山本けい子 峰山光男 竹内洋子 平尾ひろみ 成松繁樹 室山禎哉	井山良彦 浅野訓正 岡本尚久 田尻卓也 野崎建二 鼻先 功 中村慎一郎 藤井祥子 田中達也 麻生高行 丸川雅紀 高橋 満 舛田承治 内田健二郎 濱田美智子 久保田賢一 吉岡妙子 河村秀樹 河村典子 末永雅之 松岡敬子 森重辰夫 小笠原武也 中村光雄 吉成朝子 佐伯達矢 知古嶋達也 中村 光 小松美絵 中村章子 小段和彦 堤 稚桂子 坂口佳織 岡田崇志 池田裕樹 中上直樹 櫻木麗華 清水康弘 八原正治 上野美穂 江崎武志 土肥 純
--	--	--	---	---	---	--	---

From Editors

●今月号では、普段とくに経験することができない貴重な自然の営みの様子をお届けすることができた。屋久島いなか浜でのウミガメの産卵の様子や屋久スギの原生林の深閑とした情景、写真家吉田 繁氏が世界を歩いて撮影した巨樹たちの生命力みなぎる神秘的な姿はすばらしかった。自然はいろんな形で私たちをいつも感動させてくれる。(真下)

●サラリーマン生活30余年、それなりに心がけてきたことは現場をよく見る、現場からの発想に学ぶ、理屈は後から、できれば理屈をたれないである。今回、視察で屋久島をはじめ各種プロジェクトのサイトを訪ねさせ

ていただいたが、それぞれが抱えている問題にいかにも真摯に取り組んでおられるか、NGOここにありとの気概に接し、少しでもお手伝いできる業務の末端を担える幸せをひしひしと感じている。(末松)

●恒例の「企業とNGOの交流会」は170名余の方々にお越しいただき、大盛況だった。あちらこちらで夢のある楽しいお話やさまざまな課題事項をお聞かせいただいた。これからの活動は大変であるが、新たな協働の場づくりに、少しは貢献できたのではと思っている。(谷口)

# 第18回報告会の概要

## ■6、7月に4団体の報告会を実施

5月以降、7月までに4団体の活動成果報告会を実施した。まず、6月に行った「ラムサールセンター」の報告会(第17回)は、会員企業の会議室をお借りして開催した。目的は、当該企業の従業員の方々にもご参加いただき、幅広くNGOの活動を知っていただくためである。当日は50名ものの方々にお集まりいただき、ラムサール条約締約国会議を補完するものとして評価され始めている「アジア湿地シンポジウムの活動」について報告を受けた。なお、当日、事務局の中村玲子氏が「ラムサール湿地賞」受賞者に決定したとの一報が入った。

続いて7月に行った「メコン・ウォッチ」の報告会(第18回)は、担当の木口由香さんに、現地からの帰国の合間をぬって駆けつけていただいた。第19回の報告会では、インドネシアでの違法伐採問題を切り口に、輸出入統計調査の実態把握と法執行対策を図っている「トラフィック イーストアジア ジャパン」と、違法伐採などによる森林の減少に大きな影響を受けているオランウータンの保護活動を進めている「日本・インドネシア・オランウータン保護調査委員会」の報告会を併せて行い、生態系全般にかかる影響について考える機会を持った。

今回は、第18回の「メコン・ウォッチ」の報告会の様子を以下に記す。

## ■第18回「メコン・ウォッチ」活動報告会

プロジェクトテーマは「ラオスにおける環境番組の制作と環境教育への利用」である。

ラオスは世界の最貧国のひとつといわれ、人口568万

人、GNP21億ドルにすぎない。かつては自然環境に即した農業・狩猟採集で生活し、自然環境は比較的良



報告を行う「メコン・ウォッチ」の木口由香さん(写真左)、東 智美さん。

好な状態に保たれてきたが、80年代後半から多くの援助や経済開発を受け入れ、速いスピードで環境が変化している。そのため、一部では伝統的管理を崩し、川や森などの資源劣化につながるケースも見られるようになった。今日のラオスにとって環境問題と持続的な自然資源管理に重点を置いた情報収集は緊急の課題であり、よりよい開発に向けた情報を社会に還元することや、影響力のある援助国である日本社会での理解を高めることが重要となっている。

プロジェクトはカムアン県など南部4県の地方テレビ局にスタッフをトレーナーとして派遣して指導を行い、環境番組制作を行うこと。今までに計13番組を制作し、各局月2回の定期放送枠を確保し、放映している。また各局の制作番組を鑑賞・評価する場を設け、番組水準の向上を図るべく話し合ったり、番組担当者を対象としたワークショップを開催するなど、少ない予算で良質の番組を作る手法を指導する場としている。ワークショップでは番組で取り上げるテーマを議論し、「森林問題」「非木材林産物の利用」「ラオスの伝統文化と村落生活」「資源保護」などが候補として出された。

制作した映像のうち2本を日本語に訳したが、今回はそのうちの1本「ナカイ高原の裾野のカニ、ハーブカニ」を鑑賞した。最後に、国際河川であるメコン川の管理に関することや、世界銀行の行っている貧困削減のための開発プロジェクトについて質疑がなされた。

### ●報告内容一覧

第17回 ラムサールセンター(中村玲子事務局長、武者孝幸事務局長代理)  
「アジア湿地イニシアチブの構築」 於:積水化学工業

第18回 メコン・ウォッチ(木口由香プロジェクト・コーディネーター、東 智美ラオス担当)  
「ラオスにおける環境番組の制作と環境教育への利用」

第19回 トラフィック イーストアジア ジャパン(石原明子プログラムオフィサー)  
「インドネシア熱帯林の生物多様性保全に寄与するための木材取引調査プロジェクト」

日本・インドネシア・オランウータン保護調査委員会(鈴木 晃代表)  
「東カリマンタン州のオランウータンの保護・調査プロジェクト」



ラムサールセンターの報告に聴き入る参加者。





屋久杉の江戸時代の伐採跡。

## 大いなる自然と ボランティアの熱意を実感

日本経団連自然保護協議会企画部会長  
トヨタ自動車株式会社 環境部企画担当部長  
西堤 徹

### ●スタディーツアー実施の意図

日本経団連自然保護協議会の企画部会は、会員企業のうち22社に参加していただき、「日本経団連自然保護宣言(2003年3月公表)」の草案作成など、協議会のさまざまな活動をサポートしている。これまで、NGOとの交流会や意見交換会において、「企業担当者もプロジェクトの現場を見ることが相互の理解を深めるためにも重要」との意見が数多く出されていた。そこで、04年度企画部会の重点実施事項のひとつとして、「支援プロジェクト、特に国内のサイトをスタディーツアーとして訪問視察する」ことを掲げ実施した。

04年度は、清里の「やまねミュージアム」と霞ヶ浦の「アサザ基金」の2カ所を訪問。実際に現場を見て、現地で活動する方々と意見交換することによって、経団連会館での報告会等では十分に理解できないスケールの大きさや自然の匂い、特にスタッフの皆さんの情熱などを実感できた。貴重なご寄付が、自然保護・生物多様性保全等に貢献していることを確認して、皆様にお伝えすることが、企画部会の重要な役割のひとつと考えている。

### ●ウミガメ保護を5年にわたり支援

05年度最初のスタディーツアーは、いくつかの候補の中から、企画部会メンバーの希望が多かった屋久島を訪問した。屋久島ではNPO法人屋久島うみがめ館のプロジェクト「北太平洋において最大の産卵場である屋久島のアカウミガメの保護」を5年にわたって支援しており、いなか浜、前浜の同ブ

### ●参加者

- |       |                                     |
|-------|-------------------------------------|
| 西堤 徹  | トヨタ自動車株式会社 環境部企画担当部長                |
| 柳井俊郎  | 積水化学工業株式会社 環境経営部担当部長                |
| 木内 栄  | 前田建設工業株式会社 環境・安全部副部長                |
| 古川彰洋  | 株式会社ジェイティービー コーポレートコミュニケーション室マネージャー |
| 安藤 誠  | 東京海上日動火災株式会社 CSR室長                  |
| 青木 滋  | 本田技研工業株式会社 社会活動推進室主幹                |
| 菅野悠紀雄 | 政策研究大学院大学 教授                        |
| 日塔憲夫  | 松下電器産業株式会社 東京社会文化チーム参事              |
| 鈴木和夫  | 富士ゼロックス株式会社 環境経営管理グループリーダー          |
| 富沢泰夫  | 株式会社損害保険ジャパン コーポレートコミュニケーション企画部課長   |
| 島守哲哉  | 日本原子力発電株式会社 総務室課長                   |
| 山辺清和  | 日本電気株式会社 社会貢献室エキスパート                |
| 本橋利文  | 王子製紙株式会社 植林部長                       |
| 小林秋道  | 住友林業株式会社 環境経営部チームマネージャー             |
| 真下正樹  | 日本経団連自然保護協議会 顧問                     |
| 末松哲治  | 日本経団連自然保護協議会 事務局長                   |
| 谷口雅保  | 日本経団連自然保護協議会 部長                     |
- (敬称略、順不同)



屋久島で行われたスタディーツアーに参加した皆さん。後ろの建物が屋久島うみがめ館。

## 特集2

### スタディーツアー

去る6月3日(金)、4日(土)の両日、日本経団連自然保護協議会の企画部会を、鹿児島県屋久島にて開催しました。屋久島は、当基金が5年にわたって支援しているNPO法人屋久島うみがめ館のプロジェクトサイトです。17名のメンバーが、世界自然遺産域にある屋久杉の森林地帯、ならびにウミガメが産卵するいなか浜、前浜を視察いたしましたのでご報告します。

# 屋久島で 企画部会を開催

プロジェクトサイトと世界自然遺産域にある屋久杉の森林地帯の視察を行うことになった。屋久島うみがめ館のサイトでの詳細については、日本経団連自然保護協議会の末松哲治事務局長の訪問記に譲るが、アカウミガメの産卵に立ち会うことができ、大変貴重な経験をさせていただいた。

### ●屋久杉の歴史と迫力を目の当たりに

屋久杉林の見学は九州森林管理局の元村正彦調整官にお世話いただき、島内各所をご案内いただいた。まず「屋久島環境文化村センター」では屋久島の概要について教えていただき、全体像をざっと把握することができた。その後、モッコム岳登山口近くからは、岩盤から降りそそぐ千尋の滝のすばらしい眺めを堪能できた。

次に寄った「屋久杉自然館」では、写真家でもある日下田紀三館長じきじきに案内していただいた。館内には伐採された年輪1,660本の屋久杉があり、その細密さ、緻密さに大いに感心した。また江戸期から伝わる山樵具の展示等は屋久島の木の歴史・文化を感じるすばらしいものであった。

その後「紀元杉」「ヤクスギランド」を訪れた。ヤクスギランド内では木道がきれいに整備されており、また体力に合わせてコースが設定されるなど、訪れる人に十分配慮されており、清新な空気の中、倒木更新や江戸時代の伐採跡など見ることができ、たいへんすばらしかった。残念ながら日程の都合上、縄文杉へは行けなかったが、屋久杉の迫力を堪能できた(メンバーのうち3名は、翌日、縄文杉見学登山をされた)。

今回も含め3回のスタディーツアーに参加したが、現地現物で特に確認したことは、代

表の方はもちろんだが、スタッフの皆さんの情熱であり目の輝きである。今回も多くの大学生・社会人がボランティアで、午後7時頃から明け方まで浜辺を走り回り、ウミガメをわが子のように世話されている姿を拝見していると、文章や写真では十分にご理解いただけないと思うが、皆様のご寄付が、生物多様性保全等のさまざまなプロジェクトを支援し、非常に役立っており、また関係者から感謝されていることを改めてお伝えし、今後も一層のご支援をお願い申し上げたい。

## 屋久島うみがめ館 プロジェクトサイト訪問記

日本経団連自然保護協議会 事務局長  
末松哲治

### ●ウミガメのメッカ

#### 屋久島永田地区を訪ねて

鹿児島港から種子島を経由して約2時間半、高速船トッピー(トビウオ)を下船したわれわれ一行17名を待っていてくれたのは、屋久島うみがめ館の代表大牟田一美さん。さっそく、アカウミガメの産卵で日本の過半を占め、アオウミガメの日本の上陸北限でもあるウミガメのメッカ・永田地区のいなか浜、前浜に向かう。

夕暮れ時、昨夜からのウミガメの上陸痕跡が幾筋か残る浜を前に、20年前の1985年、都会からUターンし、当時の村の若者とともにウミガメを主役に浜を残し、村づくりができたらとの想いから出発したウミガメ保護活動の現況を、大牟田さんは熱く語ってくれた。

### ●20年にわたる活動も「光陰矢のごとし」

当初3カ月だった調査期間が5月から9月の5カ月半となり、その一日のなんと長いとか。ウミガメが上陸し、産卵する夜9時ごろから明け方にかけて観察、保護、調査活動を繰り返し、その後を睡眠時間に当て、午後からはウミガメの足跡調査や浜に隣接する活動拠点「屋久島うみがめ館」を訪れる観光客などに、ウミガメの生態や保護・調査活動の必要性等を説明、啓蒙する日々。台風などを除き、雨の日も風の日も浜に出る日々のことなどなど。しかし、振り返ってみればアツという間の20年とのことだ。

また、この間には91年から92年にかけてウミガメの上陸・産卵数がピークを迎え、その後減少の一途をたどったが、2002年から急激な増加に転じ、昨年には調査開始以来最大の上陸数(アカウミガメ5,091回/産卵2,125回、アオウミガメ90回/産卵23回、標識調査による個体数アカウミガメ709個体、アオウミガメ6個体)を記録したこと。93年の台風での浜の砂の大流失や同時期の松林の全滅などの危機を乗り越え、浜の回復、強い松の植林などに村も一致団結したこと。さらには93年12月の屋久島の世界自然遺産登録以来、観光客が急増し、近年ではNHKテレビ連続ドラマ「まんてん」の影響でさらなる増加を見るなど、ウミガメが安らぐ環境には程遠くなっていることなど、話は尽きない。

### ●悩みは観光振興との両立

心ない観光客の問題が全国各地で取り上げられているが、産卵で上陸をうかがうウミガメは光や人の気配に鋭敏で、観光客が車で来る際のヘッドライトの明かりや、ペンライトなどをかざし、むやみに浜を歩き回ること



モッコム岳登山口近くから見た千尋の滝。



樹齢3000年といわれる紀元杉。



島内各所をご案内いただいた九州森林管理局の元村正彦調整官。



で、悪意がなく無意識にでもウミガメに悪影響を及ぼしているとのことだ。実際、上陸しても産卵せず戻るかめ、砂が踏み固められて孵化しても地上に出られず死ぬ子ガメ、踏みつけられる子ガメ、ヘッドライトやペンライトの明かりに誘われ海に帰れず死に絶える子ガメ等々、あげればきりがなしとのこと。

ウミガメが屋久島の観光振興の重要な柱となっている限り、保護活動はそれとの両立を模索していかなければならないが、永田の浜は世界自然遺産の対象範囲から外れており、また浜辺に面した土地には民有地が多く、ホテル、キャンプ場もあるなど、オーストラリアのように国が一元的に所有・管理している理想的な状況からほど遠く、地元の観光ガイドも過剰サービスに走りがちなこと、規制する側も国、県、町村で必ずしも足並みがそろわないことなど、ウミガメの受難の種は断ちがたく、20年の感慨に浸っている暇はなく新たな活動へ意欲を燃やしていくとのことだった。

### ●漆黒の浜で、ついにウミガメに出会う

訪問当夜は新月にあたっており、ウミガメ上陸には格好とのこと。宿での夕食もそこそこうみがめ館にとって返し、今一度大牟田さんとボランティアの皆さんからの注意事項を頭に焼き付け、9時半ごろ二手に分かれて真っ暗な中、いなか浜と前浜に向かった。

漆黒のいなか浜に下り、目が慣れてきたところで砂浜にうすくまるいくつかの物体に遭遇した。ついにウミガメに会えた！感激と興奮でもたもたしている筆者を尻目に、すでにボランティアはウミガメに標識が付いているか、体長の測定や産卵状況の確認作業などをテキパキと行っている。さすが、と感心しきり。こんなボランティアの皆さんの活動に自然保護基金の助成金が役立っているなら、有意義この上ないと悦に入りながらも、何の役にも立たない筆者は、産卵中のウミガメの背後でじっと息を潜め、大自然のドラマにただただ酔いしれた。

12時近く、早朝からの長旅に眠気もピークに達し、宿に戻ろうと立ち上がったとき、波打ち際から黒い物体がそのそ這い上がってくるのが見えた。とたんに「皆さん岩になってください！」とのボランティアの指示。腰を下ろし息を潜めること20分あまり、人の気配と産卵前の高ぶりからか、警戒心の強いウミガメの歩みは遅く、なかなか産卵のための穴掘り作業に入らない。ボランティアの注意事項を思い起こし、名残惜しかったがウミガメの前を横切るのを避け、遠回りして浜を後にした。



木道がきれいに整備されたヤクスギランド。



屋久島うみがめ館で代表の大牟田一美さんとボランティアスタッフの皆さんにお話を伺う。



浜に残るウミガメの上陸痕跡。



訪問当夜の11時頃、いなか浜に産卵されたウミガメの卵(フラッシュを使わず撮影)。



連載

企業が進める  
自然環境教育の現場を訪ねて

2



とんぼ池でインストラクターから説明を聞く小学生たち。

## 子どもも大人も楽しめる自然環境教育

東京電力「横浜火力発電所」

# TEPCOペアウォッチング 自然観察会

自然保護や環境保全のために、企業自ら地域の人たちやNGOとともに積極的に取り組む事例が増えてきました。

そんな企業の活動の様子を現場に出向いて取材し、シリーズで発信しています。

第2回は、10年以上も続いている東京電力株式会社の「TEPCOペアウォッチング自然観察会」の現場をご紹介します。

※取材：2005年6月21日、事務局／真下

### 社員がインストラクターの TEPCOペアウォッチング自然観察会

「TEPCOペアウォッチング自然観察会」を取材した私たちは、ほぼ終日を小学生の賑やかな声に囲まれて過ごしました。おかげで、自然の恵みを知るだけでなく、小学生から若さと元気を授けてもらった一日となりました。このように、「TEPCOペアウォッチング自然観察会」は、子どもだけでなく大人まで存分に楽しむこ

とができる自然観察会です。

この日は、小手指小学校(埼玉県所沢市)、6年生103名の自然観察会が予定されていました。梅雨本番とはいえ、すでに真夏の太陽が顔をのぞかせ、うだるような暑さのなか、私たちは小学生の皆さんと一緒に横浜火力発電所で実施されたプログラムに参加しました。横浜火力発電所の敷地約44万㎡のうち2割以上を占める広大な緑地に入ると、京浜工業地帯の中にいるとは思えないような爽やかな気分となります。

自然観察会で指導するのは、(株)当間高原リゾート(新潟県十日町市)「あてま自然学校」でインストラクターをしている桜井さんと朝倉さん。2人とも東京電力の社員です。指導にあたるうえで大切にしているのは、自然と触れ合ったときの「感じる」力を育むことです。その感じたことからくる好奇心により「調べる」という学びを経て、仲間に「伝える」ということも同様に大切にしています。これを繰り返すことによって、人と自然が共に生きるための基礎が築かれると考えています。

### 自然観察会のプログラム 生き物採取

当日のプログラムは生き物採取。まずは自然に触れることから始まりました。7~8人の班に分かれて、発電所構内緑地の樹林や草地、ビオトープで、小学生たちは生き物探しを始めました。おとなしかった小学生たちも、各班に分かれて生き物採取の作業が始まると、すぐに目が輝き出しました。芝生の丘では「あっ、バッタだ」、池をのぞき込んで「トンボだ」と元気な声が上がリ、始まってわずか30分程度の採取時間でしたが、どの班もさまざまな生き物を見つけました。

緑地に生息するショウリヨウバッタやイトトンボ、ナナホシテントウムシなどの昆虫類や、緑化木として植えられたヤマモモ、エゴノキ、ハクウンボクなどの花や実など、限られた緑地の中にこれほどの生物がいるとは、私たちも含めて、発見の楽しさと驚きを体感しました。

続いて班ごとの発表会。インストラクターからその自然界における生き物の生態や生息環境などの説明があり、単に自然と触れ合うだけ



TEPCOペアウォッチング自然観察会のフィールド(横浜火力発電所内緑地)。



でなく、自然界の仕組みについても学ぶことができます。

### 自然環境教育は自ら学ぶ知恵となる

最近の小学生は、テレビゲームに明け暮れているのではないかと思っていましたが、間違いであることに気づきました。子どもたちにとっては、自然に接する機会が少なくなってしまった社会環境ですが、近くに自然に接しやすい環境さえあれば、自ずと自然に親しみ、自然を理解しようします。そして“自然との上手な付き合い方”を自ら考え、自然を大切にします。

自然環境教育を理論立てて大人が難しく教える必要もなく、自発的な学習が行われる場所と仕組みを提供する工夫さえできれば、子どもたちには自ら学ぶ知恵が育まれる。「TEPCOペアウォッチング自然観察会」の現場では、教育にとって大切なこのことを強く実感しました。

### 「TEPCOペアウォッチング自然観察会」の経緯と活動

ペアウォッチングが生まれることとなったきっかけは、一人で自然を観察するよりも仲のよい二人(ペア)で観察する方が楽しいし、お互いに語り合い、新しい発見をし合う喜びを一緒に体験してもらえるに違いない、そういった考えからでした。1993年以来、ここ横浜をはじめ、横須賀、大井、袖ヶ浦、東扇島の火力発電所、福島第一、福島第二、柏崎刈羽の原子力発電所などで実施し、この12年間に、延べ7,000名以上の方々の参加がありました。

### 教職員を対象とした環境教育研修会の開催

さらに東京電力は、「TEPCOペアウォッチング自然観察会」で培ってきた自然観察の手法を学校教育の場でも活用していただくこと、教職員の方々を対象とした研修会も開催してきました。

「総合的な学習の時間」の導入に呼応し、全国小中学校環境教育研究会とともに99年に第1回を当間高原リゾートで実施しました。以来毎年、自治体とも協力しながら、小中学校の先生



ビオトープでの生き物採取の様子。



芝生の丘で採取されたショウリョウバッタなどの生き物。

方を対象に研修会を続けています。これまでに1,000名弱の先生方が研修会に参加しました。

研修会では、自然観察の指導にあたっての基本的な理念や実践の心構え、実際の活動を通じての具体的な手順や留意点、日常の「自然体験学習指導」に役立つ「指導用ツール」の開発など、実践的な研修を行っています。

また、「TEPCOペアウォッチング自然観察会」で蓄積されたノウハウが、自然観察型の環境教育支援ツール「自然観察アクティビティHANDBOOK」としてまとめられています。具体的には、自然案内人となるための基本姿勢として「五感」を大事にすること、「身近なフィールド」から始めることなどが述べられているほか、自然観察実践の心構えや危険への対処法の習熟についても記載しています。これから自然環境教育を始める人にとっては、わかりやすい親切的な実践手引書です。

#### ●取材後記●

「TEPCOペアウォッチング自然観察会」が12年間にわたって長続きしてきたのは、身近な自然のフィールドを対象に、子どもから大人まで楽しく参加できるプログラムとなっていること、自然に直接触れて感じる大切さを伝えてきたこと、そのためにスタッフの方々が実際に現場で活動をしてこられたこと等々、事務局は強く印象づけられました。

## 東京電力 「横浜火力発電所」と 「トウニー・ヨコハマ」の ご案内 ～人と環境にやさしい都市型発電所

「横浜火力発電所」は、クリーンなエネルギー資源であるLNG(液化天然ガス)を燃料とし、最も先進的な発電技術を備えた施設。発電設備は、ガスタービンと蒸気タービンを組み合わせたACC(改良型コンバインドサイクル)発電方式を採用し、発電効率は49%にまで向上している。

「トウニー・ヨコハマ」は、発電所敷地内に併設されている電気のエネパーク。エネルギーの歴史を映像で伝える「地球ギャラリー」や「電力情報ステーション」などが完備され、気軽に見学できる充実した施設となっている。

最新鋭の火力発電設備の見学もおすすめ。高さ200mの「ツインタワー(排気塔)」に上れば、横浜港を眼下に京浜地域から首都圏が展望できる。なお、トンボやメダカが息づく、広い緑地も自由に散策できる。

### 「トウニー・ヨコハマ」へのお誘い

◆開館時間: AM9:30~PM5:00

◆入場料: 無料

◆休館日: 毎週月曜日(祝・祭日の場合は翌日)・年末年始

◆住所: 〒230-0053 神奈川県横浜市鶴見区大黒町11-1

◆お問い合わせ: TEL.045-511-1222

◆ホームページ:

<http://www.tepco.co.jp/yokohama-tp/index-j.html>

◆交通機関: JR京浜東北線鶴見駅からバスで約20分、または京浜急行生麦駅からバスで約10分、「横浜火力発電所」下車



公益信託 日本経団連自然保護基金

*Keidanren Nature Conservation Fund*

日本経団連自然保護協議会

**KNCF** *Nippon Keidanren Committee on Nature Conservation*

日本経団連自然保護協議会

会 長：大久保尚武

事務局：〒100-8188 東京都千代田区大手町1-9-4 経団連会館6階

TEL.03(5204)1697 FAX.03(5255)6367

URL <http://www.keidanren.or.jp/kncf/>

